

**中央教育審議会 初等中等教育分科会
幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
—第 10 回会議の主な意見等の整理—**

(データの蓄積・活用)

- 子供を取り巻くデータを収集してデータベース化することが重要である。データ収集に当たっては、子供の成長が見えるようなものであることも大切である。

(組織的な取組みにするための方策)

- 5歳児や1年生の担任のみが幼保小の接続を担当するのではなく、組織的な取組とするためには、幼保小の各施設の分掌に接続担当者が位置付けられ、役割が明確になる必要がある。
- 幼児教育施設や小学校の関係者への取組推進へのメッセージとともに、ステークホルダーに向け、具体的な変化やメリットを示した方がよい。
- 若手は管理職等の意見に従いがちである。管理職、ミドルリーダー、若手が、主体的に意見を述べ合ったり、若手の力を生かしたりして、保育の質を高めている好事例があると、他自治体や現場で参考にしやすい。
- 関心や意識が低い方は研修への参加率が低い傾向にある。接続については、教職員全員が理解すべきことであり、全ての教職員に学ぶ機会が保障されることが望ましい。国による働きかけを期待したい。
- 子供を中心としながら全てのステークホルダーの連携が大事であること、それぞれの役割と相互作用について、1枚の図で示したものとよい。
- 幼小の先生の対話が盛んになると子供理解が共通になり、子供の周囲の環境、指導や教材について共通に語ることができ、指導の改善につながる。
- 幼小の先生の対話が盛んになると子供理解が共通になり、子供の周囲の環境、指導や教材について共通に語るができ、指導の改善につながる。
- 優れた人材を確保することが架け橋期の教育において重要であること、養成課程で架け橋期カリキュラムを扱い、将来を担う保育者や教員が、架け橋期をさらに展開していくことが重要である。
- 関係者や人生の先輩などが、皆、ファシリテーターになっていくと思わないと事がなせない。また、先生たちが本気になって子供たちにとっていい環境づくりができるかということを考えていく必要がある。

(特別な配慮を必要とする幼児への支援)

- 特別支援に関する専門的な知識を持つ者が、子供への関わり方の相談に応じたり、保護者との面談に同席したりして、一緒になって小学校につなげていけるとよい。
- 家庭の今までの育ててきた経験値と、園での教育の経験値をすり合わせた上で引継ぎをする必要がある。特に、特別な配慮が必要な子供については、園における支援なども引継ぎ、小学校で生かしていくことが大切である。

(働き方改革)

- 保育の質向上のためには、職員同士が語り合う場と時間が必要である。昨今、教育・保育者に求められることが多く、国において、人材不足の問題や勤務環境の改善を行い、働き方改革を推進してほしい。
- 子供の力を信じて、真摯に耳を傾けられるよう、時間や場の確保、保育者の育成も含めて検討する必要がある。
- 保育者を志望する者の増加のためには、勤務改善等はもう少し書いた方がよい。
- 家庭や地域との連携を進めるためには、サービス提供を受ける者ではなく味方につけること、小学校の先生たちの発言力の活用、3歳児健診などで架け橋プログラムをPRなどが必要である。

(架け橋期の教育)

- 架け橋期の教育の重要性を強調し、小学校や保護者も主体者であることが伝わった方がよい。
- 養成課程に架け橋期のカリキュラム論が位置づくとうよい。
- 冒頭の教育の一貫性では、18年間の教育の中の幼児期から小学校の低学年が重要であり、一貫性の基礎になることを記載する必要がある。全ての子供の育成でも、小学校低学年教育の重要性があった方がよい。
- 保幼小連携接続は、昭和44年の中央教育審議会の46答申以来議論されており、今回、架け橋期として一体になって低学年教育まで含めて出すことの価値や意義を入れてほしい。
- 架け橋期の教育について、小学校の先生方に知ってもらう必要がある。思春期に課題に直面する子供たちとか若者を見ている中学校とか高校の先生方についても、子供にとって大事なことは先取り教育ではないということを周知できるとよい。

(研修の充実)

- 研修を通して、自己の課題や架け橋期の教育の実践に必要な資質に気付くことができる。自己のキャリア形成に応じて必要な研修を選択できるような体系的な研修の仕組みがあるとよい。
- 研修は、ICTのみではなく、対面も重要である。園種を超えた、小学校も巻き込んだ職員間の対話を深めるような研修を実施することで、施設類型や校種による文化や背景の違いが見えてくることがある。対話では、幼保小では、主体的、対話的で深い学びを進めているといった共通的なことを取り上げるとよい。
- 先生たちが授業や保育を変えようとする主体性のある人材育成では往還型研修が重要である。また、幼小をつなぐためには、両方についてかなり熟知し、対話を促進できるような人が必要であり、そうした人材を育成する研修も必要である。
- 例えば、お昼寝の時間を活用して研修動画の視聴等、ICT機器による効率化を図り、対話による研修の充実が図られるとよい。

(保護者との連携)

- 家庭の当事者意識を高めるため、幼児教育の指導案等を保護者に提示し、我が子や保護者自身のメリットを示す必要がある。
- 子供が生き生きと園で遊ぶ様子を配信することで、保護者の入園希望が増えた実績がある。幼児教育について、保護者にわかりやすく伝える工夫が必要である。